

令和8年度 比治山大学
現代文化学部・健康栄養学部・短期大学部
一般選抜 A日程 問題

国 語

受験番号	
氏 名	

解答上の注意

1. この問題冊子は、表紙を含み1ページから11ページまであります。
また、解答用紙は1枚です。試験開始後、すぐに中を確認、印刷
や枚数などに不備と思われる点があれば、手を挙げて監督者に知ら
せなさい。
2. 解答は、すべて、解答用紙の所定の欄に記入しなさい。
3. この問題冊子と解答用紙を持ち出してはいけません。

I

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問中に字数制限がある場合、句読点等も字数に含む)

「カビの生えたような学問」という言葉があるが、私がやっているのは「カビが生える学問」^Aである。私が主な研究材料にしている、いもち病というイネの病原菌は、子のう菌という真菌(カビ)に属している。カビの生えたような学問というと、狭く薄暗い研究室で白衣を着た学者が顕微鏡をのぞいているというようなイメージがあるが、この時代にあつてカビに興味をもつ研究者というのは、どこことなくそれに通じるものがある。アメリカのカリフォルニア州にあるアシロマ会議場で(ここは1975年に国際的な遺伝子組み換え実験のガイドラインが打ち出されたことで有名なアシロマ会議が開かれた場所でもある)、2年に1度、世界中の「カビマニア」が一堂に会するFungal Genetics Conferenceという学会が開かれるが、その比較的小さな国際会議の木造の薄暗い会場には、どこことなく古き良き時代のサイエンスの芳香が漂っている。

今さら言うまでもなく、現代では自明の善としていろいろなことが開かれていく方向に進んでいる。開かれたこと^Bつまり情報の交換や物質の流通などが、物事の健全な発展のために必要なことは論を俟たない。そういう意味では、この時代は過去と比べて本当に恵まれていると思う。大陸間の移動でさえ、豊かな国では普通の庶民が無理なく行えるようになり、欲しいと思う情報のほとんどはインターネットやテレビなどの通信手段によって手に入る。こういう開かれたこと^Cが現代社会の基礎を作り、その発展に大いに寄与していることは、もう圧倒的に明らかなことである。

けれど、一方で私が最近とみに思うのは、もつと閉じられたこと^Dというものの大切さが意識されても良いということだ。昨今の風潮は、閉じられたこと^Eの持つエネルギーや密度について、あまりに無頓着になっているような気がする。

X ということを、誰の目にも見て分かる「昼の力」とするなら、**Y** ことは、簡単には見えない「夜の力」みたいなものだ。基本的な純度のあるものは、閉じられているから存在できる。赤い絵の具を池の中に落とせば、その色はなくなってしまう。どんなものであっても、その偏りや純度を保つためには閉じられた時空間が必須だ。そのことの意義は意外に大きいと思う。

その文脈で言えば、昔、日本は島国で鎖国までしていた。その閉じられた時空間の中で、日本の文化というのは育まれてきた。ちょんまげや羽織袴、刀、お城そして日本語、そういうものが、その文化の中である種の密度を持ち存在し

た。(a)、明治以後、多くのものを開き、西洋文化を取り入れてきたことで、たとえば着物文化というようなものは、その内在的な文化としての力を失ってしまったように見える。こんなことを言うのも不謹慎かも知れないが、以前は、もし日本という国が圧倒的な軍事力を持ち、世界を席巻していたら、世界のみんなが着物を着るようなことになっていた、そんな未来の世界の姿の一つとなる可能性を内包する密度と力を持って存在していたと思う。しかし、残念ながら現在ですでに着物に、そういった未来の世界の姿を担うだけの密度はないような感じがする。垣根を取り払い、開かれたことで、相対的に弱い文化が密度を失い力をなくしていく。この日本語という言葉も、日本人の英語下手という壁に守られ、現在はまだ生命力のある言葉として存在しているが、幼い頃からの英語教育が盛んになり、大学の授業は英語だ、社内の公用語は英語だ、といった状況が進んでいけば、かつてのネイティブアメリカンやマヤの人たちの言葉が実質的に失われていったように、日本語という文化も一部の収集家によって保存されるだけのものになっていくのかも知れない。英語を第二公用語にしようというような話が持ち上がる我が国であるから、それもまったくあり得ない話ではない。

(b) 着物も日本語もローカルな文化で、そんなものにシチュエーション^②を必要はないという人もいるだろう。私も特に着物を着たいとは思わない方だが、私がここで問題としているのは、文化的アイデンティティーとか愛国心とか、そういうこととは少し違う。たとえばガラパゴス諸島やオーストラリア大陸で、独自の進化が起こり、我々から見ると奇妙な生物たちが繁栄したのは、これらの地域が地理的に隔離されていたことが最も重要な要素だったことは疑う^③余地がない。閉じられたこと^Dが、その時主流となっていた事象と、その亜種や改良版ではない、まったく違った形の生き物や文化を生む母体となっているのだ。閉じられたこと^Dには、そういう力があるのではないかと思う。

何の形も境界もない混沌の中から、何かが形を作っていく時。(c) それが醸熟し、萌芽していく時。そこでは、わずかな風が外から吹き込むのも嫌がるような、外界とのつながりが一旦遮断された、濃密で、閉鎖的な時空間が必要とされることがあるのかも知れない。そういえば子宮もある意味、閉じられた空間だ。そのイメージの延長線上にある。こういった考え方は、本当に新しいものが求められる芸術の世界では古くから大切にされてきた。秘められた感情、ヨクアツ^④された情熱、そういった簡単には人に話せない、心の奥に封じ込まれた物語がセンレン^⑤され、閉じられた空間から一気に日の当たる場所に解放される時、多くの人を感動させる力を持った芸術になる。閉じられたこと^D

が生む、ある種の偏り、純度の高さ、内圧のようなエネルギーの蓄積。描いては消し、消しては描く、その無駄で贅沢な作業。そして「小さな世界」の genesis^(注)。閉じられたことは、育てること、に通じている。他と混じってしまえば、蹴散らされてしまうようなもの、色が消えてしまうようなものが、閉じられた空間だからこそ成長でき、成熟し、ある種の「世界」を作りあげることが可能となるのだ。

(中屋敷均『科学と非科学』による。)

注 genesis……「起源」「はじまり」という意味の英語。ここでは、新しく創造される瞬間を指している。

問一 傍線部①～⑤の片仮名は漢字に、漢字はその読みを平仮名に、それぞれ改めなさい。

問二 空欄 (a) (c) にあてはまる語を、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。
ただし同じ記号は一度しか選んではならない。

ア つまり イ しかし ウ そして エ そのため オ もちろん

問三 波線部 A「カビが生える学問」とあるが、ここで筆者が述べているのはどのような「学問」のことか。最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 研究者と一般のカビマニアが、定期的に学会で交流することによって発展を続けている学問。
イ 現代的な設備を使わず、カビの生えやすい狭く薄暗い研究室の中でひそかに行われている学問。
ウ この時代にあつて、あえてカビに興味をもつ人たちがひたむきに取り組んでいる学問。
エ カビを応用した遺伝子組み換え技術などによって、世界的な物流拡大を支えている学問。

問四 波線部 B 「いろんなことが開かれていく方向に進んでいる」とあるが、具体的にどういうことか。次の空欄を補って説明を完成させなさい。ただし、1 は十字以上十五字以内、2 は二十字以上二十五字以内で文章中から抜き出して記しなさい。

1

が過去と比べて盛んになって、

2

こと。

問五 空欄 X・Y にあてはまる語句の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|-----------|-----------|---|-----------|-----------|
| ア | X : 開かれた | Y : 閉じられた | イ | X : 閉じられた | Y : 開かれた |
| ウ | X : 純度がある | Y : 純度がない | エ | X : 純度がない | Y : 純度がある |

問六 波線部 C 「閉じられた時空間の中で、日本の文化というのは育まれてきた」の説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 鎖国政策の影響を受けて制限された国際交流の中で、西洋文明との折衷によって日本語や着物などの文化が力のあるものとして確立されたということ。
- イ 外界との接触が限られていた江戸時代の社会の中で、刀やちゃんまげなどといった日本文化が、個性的に形づくられ、独自の深まりをみせたということ。
- ウ 江戸時代の鎖国政策によって海外文化の流入が完全に遮断された結果、日本では男性的な生活様式が、変化しないまま定着していたということ。
- エ 鎖国下の江戸時代では、外部の情報や技術を積極的に取り入れながらも、相対的に弱い文化も密度を保ちながら発展しつづけていたということ。

問七 波線部D「閉じられたこと」には、そういう力がある」とあるが、どういふことか。次の空欄を補って説明を完成させなさい。ただし、

は十字以上十五字以内、

は二十字以上三十字以内で文章中の語句を用いて記しなさい。

には、

事象を生みだす力があるということ。

問八 この文章の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 他との交流が限られた共同体では、自由な思考や新しい発想が制限されるため、かえって独自の文化が発展しにくい。

イ 文化や芸術が新たな価値を生むためには、閉鎖性よりもむしろ開かれた環境における偶然の出会いや刺激が決定的に重要である。

ウ 他と混ざり合うことで強度を増した表現こそが、普遍的な価値を持つ芸術として評価される傾向があるため、芸術に交流は不可欠だ。

エ 交流が盛んな現代社会は恵まれてはいるが、他方で「閉じられた空間」にこそ新たな創造を可能にする力があることを意識するべきだ。

II

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。（設問中に字数制限がある場合、句読点等も字数に含む）

メタファー（隠喩）は比喩の一種であるが、学校では隠喩と直喩（明喩）の二種類があると教えられる。後者は「～のよう」を使うものであり、前者は使わないものであるとされる。学校で教わる比喩にはもう一つ、擬人法がある。擬人法とは「太陽のように笑った」のように、人間ではないものを人間であるかのように書くものであった。

学校教育にはほとんど取り入れられていないが、比喩は一九八〇年以降の言語学において、大きく注目されることになった。というのも、私たちは現実を認識するときに、物事をそのままで見ているわけではない。意識的にも無意識的にも「～に似ている」というように、何かとの類似によって世界を把握しているのである。

一般には比喩とは感じていない表現にも、類似関係に基づく把握は非常に多く存在している。色の名前を考えてみると、日本語に固有の色名は赤、青、白、黒の四つだけであり、他は別の事物との類似関係からつけられている。^①ムラサキは植物の名前、緑も植物、茶色は茶の色、桃色は桃の色、という具合である。また、机には「脚」があるが、これは人間の身体^②に見立てて比喩的に使っている表現である。

時間は「流れる」ものであり、過去は「振り返る」もの、未来には「進んで」、過去には「戻る」ものである。だが、時間が流れているのを見ているわけでもなければ、後ろを振り返っているわけでもない。このように、X。これも一種の比喩である。

新しい事物や状況に出会った場合にも、私たちはすでに知っている事物や状況に結び合わせて考える。小説文では、新しい状況がドウニユウされ続けるわけだから、比喩的な把握なしに書かれることはほとんどありえないといっているほどである。「羅生門」は、比喩が目立つ作品ではないが、「～のよう」といった直喩表現はこの短さにして二一回も出てきていることから、比喩的な把握で場面を描くのはごく普通であることが分かるだろう。下人が出会う老婆は「猿のような」老婆であり、その腕は「鶏の脚」のような腕と、類似関係によって表されているのである。

ここで隠喩と直喩について私見を述べておきたい。^Bかつてその違いを教わったときに、はたして「～のように」「～ようだ」があるか（直喩）、ないか（隠喩）がそんなに重要なことだろうか、と疑問に思ったことがある。「男は狼だ」とする隠喩と「男は狼のようである」とする直喩の違いが分からないと思ったのである。

比喩理論でもこの両者を区別しない立場も存在している。どちらも類似関係に基づき、別のものにおきかえるのであるから、大差はないと考えるのである。

一方、違いを認める立場としては、隠喩の場合、まず字義通りの意味で考えると、明らかにおかしいことになると考へる。字義通りではおかしいとなった場合に、別の解釈に移るものだとする。人間は狼ではないので、「男は狼だ」は明らかに偽である。そこから別様に解釈がなされると言うのである。

だが、この説明には納得がいきにくい。「男は狼だ」という文を読んで、「そのまま読んだらおかしいな、これはきつと別の意味だ」と頭の中で計算して処理する人はおそらくまい。「男は狼のようだ」といつてもほとんどかわらないではないか。

私は、隠喩と直喩を「」のような「があるかどうか」といった形式的判断で分ける意味はほとんどないと思っている。では、隠喩と直喩を分ける必要がまったくないかと思っているかというところ、そうではない。別の観点からとらえなおした方がよいと考えている。

ではそれは何か。隠喩と直喩を文字通り隠れているか明らかかの基準で考えるということである。私見によれば直喩とは、何に類似しているのか明らかかなものである。「鶏の脚のような腕」は、腕と鶏の脚を比べているが、これは視覚的な形状の類似であり、解釈のぶれがない。

「老婆は猿のようだ」はどうだろうか。見た目であろうか、それとも性質であろうか。定かではない。「老婆は猿のよう④に狡猾だ」なら性格の類似性だし、「老婆は猿のように背を丸めている」なら外見である。とすれば「老婆は猿のようだ」は単独では何が類似しているかは必ずしも明らかではないから、これも隠喩的表現であり、「老婆は猿のように狡猾だ」はそれが明らかにされているために直喩的だと言えるのではないか。

さてこの基準で考えると、「猿のような老婆」は老婆が猿の何に類似しているのか明らかでないから、隠喩ということになってしまう。ただ、「羅生門」では文脈上、外見の類似であることが明らかである。一方、「」のように「を使わない表現でも、何に類似しているか比較的明瞭なものもある。「男は狼だ」も、よく使われることもあつて何の性質を言っているのかは比較的明瞭で、「狼のように（多くは女性を）食べる」の意味で使われる。

そして、何が類似しているか分かりにくい隠喩も存在している。何が類似しているか分かりにくいもののほうが、「隠

れている」のだから、YらしいZと考えることができる。詩はこの傾向がケンチヨ^④で、何に類似しているかが明瞭な比喻は陳腐になる場合が多い。

(橋本陽介『使える! 「国語」の考え方』による。)

問一 傍線部①～⑤の片仮名は漢字に、漢字はその読みを平仮名に、それぞれ改めなさい。

問二 二重傍線部①・②の文章中での意味として最も適当なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | |
|---|-----|---|------|---|--------|
| ① | 狡猾だ | ア | 強欲だ | イ | とても醜い |
| | | ウ | 強情だ | エ | ずるがしこい |
| ② | 比較的 | ア | 相対的に | イ | 普遍的に |
| | | ウ | 絶対的に | エ | 例外的に |

問三 波線部 A 「類似関係に基づく把握」とあるが、どういうことか。文章中の語句を用いて四十五字以上五十五字以内で説明しなさい。

問四 空欄 X にあてはまる語句として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 色の表現と時間の表現との間には類似関係がある
- イ 机の表現と時間の表現との間には類似関係がある
- ウ 時間の表現は空間の表現をそのまま使用している
- エ 空間の表現は時間の表現をそのまま使用している

問五 波線部B「かつてその違いを教わった」とあるが、筆者が学校で教わった「隠喩と直喩の違い」とはどのような「違い」か。文章中の語句を用いて三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問六 波線部C「別の観点からとらえなおした方がよいと考えている」とあるが、筆者は「隠喩と直喩」を区別する基準をどう考えているか。その説明として最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 隠喩と直喩を区別する必要はないが、あえて区別の基準を設けるとすれば、二つの事物の類似点が隠れているかどうかだと筆者は考えている。

イ 二つの事物の類似点が明確に言葉に表れているのかそうでないのかを基準とし、前者は直喩であり、後者は隠喩であると筆者は考えている。

ウ ある事物と別の事物との間に性格的類似性があるかないかを基準とし、「鶏の脚のような腕」はそれがないので隠喩だと筆者は考えている。

エ 二つの事物の間に視覚的に類似するものがあるかどうかを基準とし、「老婆は猿のようだ」は明らかに直喩であると筆者は考えている。

問七 空欄 Y・ Z にあてはまる語の組み合わせとして最も適当なものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	Y…隠喩	Z…隠喩
イ	Y…直喩	Z…隠喩
ウ	Y…隠喩	Z…直喩
エ	Y…直喩	Z…直喩

問八 この文章の内容に合致するものを、次のア～エの中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 学校で習う比喻の一つに擬人法があるが、この知的技術は非人間的な事物を考察するうえで欠かすことのできないものである。

イ 一般の人は、具体的な事物の名をそのまま色名にした一種の比喻的表現だということに気づかず、日本語の多くの色名を使っている。

ウ 比喻理論は全て、学校で学習することとは対照的に、隠喩と直喩とをことさらに区別しないという学術的観点によって統一されている。

エ 小説では比喻を用いないのがふつうであるが、比喻を用いると平凡でつまらないという印象を読者に与える詩でも比喻は極力使用されない。